

氏 名	佐々木 亘 ^{わたる}
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	論 文 博 第 444 号
学位授与の日付	平成 15 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	“imago”と“dominus”——トマス・アキナスの人間論研究

論文調査委員 (主 査) 教 授 片 柳 榮 一 教 授 氣 多 雅 子 助 教 授 川 添 信 介

論 文 内 容 の 要 旨

人間とは何であろうか。トマス・アキナスにおいて、人間は何よりも「理性的」存在である。しかし、その理性的という性格は、あくまで、「人間の運動」に即して捉えられている。実際、アキナスは、主著である『神学大全』において、その第二部を「理性的被造物の神への運動について」の考察であると規定しているが、それは、「自由意思と自らの行動の権力を持つ者として、人間もまた自らの行動の根源である限り」においての“imago”である人間に関する考察に他ならない。

人間は、範型である神への運動において、「神の似像 (imago)」である。更に、アキナスは、「自らの行動の根源である」ということを、「自らのはたらきの主 (dominus) である」と言い換えている。即ち、「人間は、理性と意志によって自らのはたらきの“dominus”であり、その場合に限り、人間の行為は、人間に固有な「人間的行為」として捉えられる。このような人間的行為が『神学大全』第二部での主題となる。

従って、アキナスにおいて人間とは「神の“imago”」であり、「はたらきの“dominus”」である。しかるに、アキナスにおける“dominus”の用例の大半は、神、そしてキリストについて用いられている。この限りにおいて、はたらきの“dominus”という規定には、神の主権へと通じる何らかの「超越性」が認められるはずである。そして、このような超越性においてこそ、「“imago”の表現」と「“dominus”の主権」の間には、何らかの緊密な連関が見出されるのでなければならない。

以上の見通しのもとで、論者は次のように論述をすすめている。

第一部「“imago”の表現と表出性」：そもそも、“imago”とは、その範型の種に係わる類似性と起源をもって、範型を何らかの種的な仕方では表現する像である。人間は不完全な“imago”であるが、その不完全性は完全性へと開かれており、「“imago”へと」という点に、「完全性へと向かう者の何らかの運動」が示されている。(第一章「“imago”の概念」)しかるに、“imago”とは、もともと、そこにおいて範型が認識され得る事物であり、その表現は、範型の認識へと秩序づけられている。即ち、“imago”は、何らかの事物としてではなく“imago”として観られる場合、そこに範型が認識され得るのである。(第二章「“imago”の完全性」)また、人間における神の“imago”は、本来、知性認識というはたらき、及び、言葉と愛の発出に即して見出される類似性である。しかも、「対象の相異が、言葉と愛の種を異ならしめることは明らかである」から、人間は、神への認識と愛によって、神を“imago”として表現している。(第三章「“imago”の表現」)更に、“imago”がその範型に似ている、似ていない」という類似性は、“imago”が範型をどれだけ表現しているかという「表出性」を表示する類似性であり、“imago”に後続する仕方では“imago”から区別される。そして、似ているか否かが示されるためには、「“imago”として」認識されなければならない。人間を神の“imago”として捉える場合、人間における“imago”に後続する類似性とは、「徳の類似性」及び「徳への愛」として示される。このように、どれだけ神を“imago”として表現するかは、「この人間」の主體的なはたらきにかかっている。このため、“imago”である限りの人間に関する考察は、人間の倫理的考察に直結することになる。人間が自らのはたらきの“dominus”であるということは、“imago”の特質に由来するのであ

る。(第四章「“imago”に後続する類似性」)

第二部「“dominus”の主権」: 一方, “dominus”という言葉は, 本来, 「奴隷・僕」(servus) への「権力」と「関係」から成立している。“dominus”とは, 自らの命令によって“servus”を拘束する者に他ならない。“dominus”と“servus”とは相互に秩序づけられており, 両者の関係は, 「能動と受動に基づいて確立される」ところの, 「存在に即して相対的」で「同時的」な関係である。これに対して, “servus”とは, “dominus”の命令を通じて何かを為すために, 自らの意志によって動かされるという, 「理性的な魂によって生ける道具」に他ならない。(第一章「主権と隷属の関係」) しかし, 人間は自然本性において平等であるから, 遂行すべき奴隷的な労働に関して“dominus”に服従するよう拘束されるということが, “servus”にとって本来的ということになる。アクィナスが“servus”の従属性を強調するのは, “servus”が自らの「固有な働き」を「道具的な働き」へと秩序づけることによって道具として動かされるという, はたらきの構造を説明するためなのである。(第二章「“servus”に対する主権」) 更に, “dominus”である神はまずもって統宰者として捉えられているから, 人間は自らははたらきに対する主権を有し自らを統宰する者であるが, それでも人間はそのようなものとしてやはり神から統宰されている。この限りにおいて, “dominus”の主権とは, 統宰へと秩序づけられるべきものと考えられる。(第三章「統宰と主権」)

第三部「人間的行為の構造」: では, 「はたらきの“dominus”」ということとは, いかなる権力と関係から成立しているのだろうか。人間がその“dominus”である場合に限り, 人間の行為は倫理的考察の対象である「人間的行為」として捉えられる。しかるに, 意志の対象が「目的」であるから, 「すべての人間的行為は目的のためにあるものでなければならない」。更に, 人間は, 「自分自身を目的へと動かす」という仕方でも, 目的へと向かっている。そのため, 人間的行為は, 「人間が自分自身を動かす」という仕方でも, 「人間が自分自身によって動かされる」という観点のいずれからでも観ることができ, 「能動という仕方でも観られるにせよ, 受動という仕方でも観られるにせよ, いずれの仕方でも目的から種を獲得する」。即ち, 人間的行為の倫理的な性格は, 行為の根源であり終極である「目的」によって決められるのである。(第一章「人間的行為と目的」) だが, 人間がその“dominus”であるのは, 厳密には「目的へのてだて」に関する「選択」に過ぎない。これに対して, 「意志は必然に基づいて至福である究極目的に密着」しており, 究極目的への必然的な欲求が, 人間的行為の「前提」となっている。究極目的とは, 「意図の根源」であり, 人間は「必然に基づいて至福であることを欲している」。(第二章「人間的行為と究極目的」) その一方, 「選択する力」が「自由意思」であり, 選択には認識と欲求という, 二つの能力が係わる。そのため, 自由意思は「理性と意志の機能」として位置づけられる。更に, 意志は, 「はたらきへと様々な仕方でも秩序づけられ得る能力」であるから, 「意志のうちには, それによって自らははたらきへと良く態勢づけられる何らかの習慣があるとしなければならない」。習慣とは「永続性」を持った「質」であり, 人間的行為は「動かされて動かす」という構造において, 習慣による態勢づけを必要としている。この限りにおいて, はたらきの“dominus”としての主権は, 言わば構造的な仕方でも, 自らの本性の秩序づけに係わる習慣を必要としており, そのような習慣を通じて具体化されることになるわけである。(第三章「人間的行為と選択」) このように, 人間的行為は, 「能動と受動の根源」に基づいており, 究極目的への必然的な欲求を起点として, 自らによって自らを目的へと動かすことによって成立している。それ故, はたらきの“dominus”という主権は, 「動かす自己」と「動かされる自己」との, 能動と受動に基づく関係の上に成り立っていると考えられる。人間的行為は, その根源である目的へと自らを動かし, その終局である目的へと自らが動かされることによって, 現実態に至る。このような関係は単純な隷属でも主権でもなく, 意志が理性によって考量されることによって, 自ら動かし動かされるという動的で同時的な関係である。(第四章「はたらきの“dominus”と人間的行為」)

第四部「“imago”としての“dominus”」: さらに, 「徳のはたらきは, 理性に即するということから人間の本性に適合しているが, これに対して悪徳のはたらきは, 理性に反する故に, 人間の本性から離反している」。徳とは, 人間の本性に適合したはたらきへと秩序づける「善い習慣」に他ならない。他方, すべては神の統宰のもとに服しており, その究極へと導かれている。そして, 「神における諸事物を統宰する理念そのもの」は「永遠法」と言われる。人間は永遠法の観念を何らかの仕方でも認識しており, 人間のうちには「永遠法に調和するところのものへと向かう自然本性的傾きが内在している」。理性的本性におけるこの永遠法の分有が「自然法」である。更に, “imago”としての完成とは, 「子」としての類似性に他ならない。人間において, “imago”がそれへと向かうところの「完全性」とは, 神への「子性」における完全性である。“im-

ago”の運動は、この完全性へと向かっている。(第一章「はたらきの“dominus”と“imago”の表現」) 実際、「“imago”の類似性は、人間本性のうちに、神を受容し得る者 (capax Dei) である限りにおいて、即ち、認識と愛という固有な活動をもって、神自身に触れることによって認められる」。人間は、神の“capax”として、神の“imago”であり、「認識と愛」という固有なはたらきを通じて、範型である神に「触れる」ことができる。そして、神の“capax”として、超自然本性的な至福へと開かれ、秩序づけられているのである。(第二章「“imago”と“capacitas”」) この「受容能力」のうちに、根源的な意味での「能動と受動の関係」が認められる。なぜなら、“imago”の表現としての「能動」が、より大きな受容としての「受動」へと秩序づけられ得るからである。人間は、「自らを目的へと動かす」という仕方では、そして神を認識し愛するという仕方では究極目的へと向かっている。人間の主権は自己の行為を拘束する「権力」と、動かす自己と動かされる自己との「能動と受動の関係」に基づいており、人間は「動かされる自己」との関連において「自らを動かす」ことができる。従って、「自らの意志によって動かされる」という点に、“imago”の超自然本性的な完全性へと至る「人間的行為の可能性」が成立しており、この「能動と受動の構造」こそ「“imago”の表現」と「“dominus”の主権」の根本である。人間は、神が“dominus”であることを“imago”として表現している。「神の“imago”」とは、本来、このような「“imago”の表現」そのものの超越性において、人間の特質となっており、人間は“imago”の超自然本性的な完全性へと至る可能性において、「“imago”としての“dominus”」なのである。(第三章「“imago”としての“dominus”」)

以上から、論者は結論「“imago”と“dominus”」において次のようにアクィナスの人間論解釈を提示している。すなわち、神を“imago”として表現する“dominus”であるということが、アクィナスの人間理解における立脚点であると言わなければならない。人間的行為の倫理的意味は、「“imago”としての“dominus”」という観点から、「神への運動における“imago”の表出性」として問われている。人間の固有性は「自らの固有な活動によって究極目的に達する」という運動に即して捉えられる。人間の生の実存的意味は、斯かる“imago”としての“dominus”という地平において、個別的な仕方では問われることになる。人間は、自らの行為の主体として、自己を超えた完全性へと歩む者なのである。

論文審査の結果の要旨

西欧中世のスコラ神学者トマス・アクィナスは、その主著『神学大全』全体においてきわめて詳細な「人間論」を展開している。その人間論とは『神学大全』第1部第75問以下の人間本性の存在論的な分析だけにとどまるのではなく、第2部のいわゆる倫理学的考察、さらには第3部のキリスト論をも包み込んでいる。本論文はその第2部において展開されている人間論を、人間が「神の imago (似像)」であり、またそのことを根拠にして人間は人間の「行為の dominus (主)」であるというアクィナスの規定の意味を探ることを通して、分析しようとしたものである。“imago”と“dominus”という人間を見る二つの観点は、そのそれぞれを単独で取り出すならば、キリスト教思想家としてのアクィナスを解釈する場合にほとんど自明のことであると見なされてきたとも言えよう。しかし、この両方を連関させて総合的に人間を捉える視点を提示していることは、論者の深い洞察を示すものであると言うことができる。広範な原典テキストの渉猟と綿密な読解を通じて、本研究はアクィナスの人間論解釈に多くの斬新な視点を提示しているが、主要な成果として次の諸点を挙げるができるであろう。

1) 人間が神の“imago”であるということは、実は「“imago”へと向かうように (ad imaginem)」神によって創造されているということなのであり、『神学大全』第2部全体が人間の「神への運動」の分析であると規定されている理由は、この神へと開かれた人間の本性と本質的に関連していることを、論者は第1部において明示している。さらに、この神への運動とは、本来“imago”として存在している人間が、さまざまな行為を通じて、神のあり方をよりよく「表現し、表出する」してゆくことであると論定され、アクィナスの言う人間の“imago”性のダイナミックな性格を取り出すことに論者は成功している。

2) 第2部において、人間が自己の行為の“dominus”であるという規定の十全な意味を捉えるために、その対概念である servus (しもべ) を論者は詳細に分析している。その結果、アクィナスにおいて servus が、単純に“dominus”へ隷属するものとしてだけ捉えられているのではなく、“dominus”の道具としてではあっても、それと共同の一つの働きをなすものとしても規定されていること、また、人間の自己の行為に対する“dominus”性が神の超越的な統率と本質的に結びついてい

ることが明示されている。

3)「人間の行為の構造」と題されている第3部では、理性と意志の間の内的諸構造の分析という従来の研究の中心をなしていた視点からではなく、自己の行為の“dominus”であるとされる人間において見られる「動かす自己と動かされる自己」の区別と関係という新しい視点から人間の行為の構造が分析されている。その結果、「“imago”へと向かう」ものとして開かれた存在である人間の完成とは徳という習慣の獲得において実現されること、そして、習慣によって態勢づけられ動かされる側の自己の受動性こそが、“dominus”ではあってもあくまで神の“imago”である“dominus”たる人間の行為の基底であるという注目すべき解釈が提示されている。

4)さらには、論者は第4部において、神に似たものとなるという人間に特別の可能性を「神の受容性 (capacitas Dei)」として捉えるアキナスに注目し、本論文全体の論旨をより明確なものとしている。すなわち、人間の意志を根本的に導いている究極目的としての神との関係において、父なる神の完全な“imago”である御言葉たる御子あるいはキリストを範型としつつ、人間が神の養子となる可能性の根拠をその「神の受容性」にあるとされているのである。これはいわゆる「人間論」をキリスト論との関係にまで広げて考察することの重要性・必要性を明らかにしたものであると言えるであろう。

以上のように、本論文はトマス・アキナス解釈に「人間とは“imago”としての“dominus”である」というきわめて明確な視座を与え、その視座のもとで一貫した人間論を提示したものと見なすことができる。しかしながら、この解釈の一貫性は他方で解釈上の難点をも含みこんでいる点は指摘しておかねばならない。すなわち、アキナスにおいて人間の“imago”性は、哲学的枠組で言えば、人間が知性的本性を有するという点にあくまで基礎づけられているのである以上、その知性的本性そのものとその本性の二側面としての理性と意志との関係といった論点に論述の重心がなければならないと思われる。その点、論者は聖書の提示するいわば比喻としての「人間とは神の“imago”である」という視座にやや偏していると言わなければならない。またそのために、人間の受動性に関わる部分など、論述の一部には論証としての厳密さに欠ける面が散見されることにもなっていると思われる。とはいえ、これらがトマス・アキナスの人間論解釈としての本論文の持つ重要な成果の意義を大きく損なうものであるとは言えない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成15年1月7日、調査委員3名が論文内容とそれに関連したことがらについて口頭試問を行った結果、合格と認めた。